

國學院大學学術情報リポジトリ

近代浴場業者の人的ネットワーク：
新潟県西蒲原郡の神社調査を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 律人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001057

近代浴場業者の人的ネットワーク

——新潟県西蒲原郡の神社調査を中心に——

吉 田 律 人

はじめに

新潟県中央部、信濃川下流域に広がる蒲原平野には、水田と水田の間にいくつもの集落が点在している。そのなかの一つ、北陸自動車道巻・潟東インターに近い打越（旧西蒲原郡中之口村、現・新潟市西蒲原区中之口地区）という集落に「雀森よ幸あれ」という一九二四（大正一三）年七月に建立された石碑が存在する。これは東京市日本橋区で浴場業を営む栃倉奥太郎を称えたもので、次のような文章が刻まれている。¹⁾

身が立つたら雀森に帰って余生を送る筈であった親分は未だに帰りません。然し親分が其成功を勝ち得た辛抱と親切と正直の精神は人々の手本となって常に国に帰って居ます。親分の名は栃倉奥太郎。新潟県西蒲原郡道上村字打越五作三男として明治十六年に生まれました。二十一の時東京に出て三助から身を起し、日本橋呉服町東湯の経営者として同業間の声望を負ふて居ます。二十年前、狐の嫁入で賑はった雀森は常に親分の眼の底に浮び出

る懐かしい心の古里です。親分は国の者を世話する時、国に帰ったやうな気がするものでせう。故郷を愛する事深い親分の夢は夜な夜々雀森に飛んで居ます。雀森よ永く々々幸あれ。

この文章を作成したのは鈴木善太郎という人物で、おそらく栃倉の援助を受けた一人だろう。石碑建立の理由は、「昨年の大震災〔関東大震災―引用者注〕に親分を始め其恩顧を受けた子分達は天佑以て悉災難を遁れました。親分の厄年に当る今年此碑を建てた。子分達の願は偏へに親分の健在を祈る事です」とあり、裏面には「在東京（いろは順）」として、頼所富治、栃倉平治、河治市平、米山左和二、澤信蔵、平岡周吉、長谷川すぎ、長谷川すい、小西さき、と建立者の名前が刻まれている。⁽²⁾ここから親分と子分の結束の強さがわかるほか、成功者が同郷の後輩を援助する様子も窺える。⁽³⁾郷土史家の北澤昭松に依れば、後に栃倉は故郷に帰り、一九四五（昭和二〇）年に亡くなったという。⁽⁴⁾

さて、この栃倉のように、京浜地域の浴場業者のルーツを辿ると、北陸地方出身者が大半を占めている。特に東京の場合は全体の半分が新潟県人だったという。かつて筆者は戦前の「新潟県人会名簿」(以下、「県人会名簿」)を分析し、浴場業を営む新潟県人のうち、七割以上が西蒲原郡出身者であることを明らかにした。⁽⁵⁾また、その半分は打越を結節点とする松長村（現・新潟市西蒲区及び燕市）、漆山村（現・西蒲区）、道上村（同）の出身者で、西蒲原郡内でも偏重がある点を指摘、さらに東京や横浜の浴場組合名簿の情報から同地域出身者が戦前の浴場業界で根を張っている様子⁽⁶⁾を浮き彫りにした。しかしながら、名簿の性格からそれ以上の分析はできず、県人会非加入の浴場業者について踏み込むことはできなかった。加えて、同郡出身者が京浜地域の浴場業界に進出し、根を張っていく過程も解明できていない。浴場業者の自伝や有力者の評伝的な研究はあるものの、浴場業に関する一次史料がほとんど残っていないため、連鎖移住を引き起こす浴場業者の人的ネットワークなどは、一部を除き、未解明のままである。⁽⁶⁾

だが、上京した浴場業者が郷里に残した寄進物、具体的には、神社の鳥居や狛犬、灯籠、玉垣などを分析すること

で、浴場業者の活動の一端を窺い知ることができる。民俗学者の谷口貢が指摘するように、出郷者した成功者は地元神社や寺院、教育機関、公民館等へ寄付を行っており、これまで故郷観を測る指標として分析されてきた。⁽⁷⁾ただし、谷口は寄付行為に注目するのみで、寄進物の分析は行っていない。ここで重要なのは、神社や寺院の寄進物に浴場業者の氏名や建立年月日が刻まれている点である。そうした文字情報に県人会名簿や浴場組合名簿の情報を加えることで、県人会非加入の浴場業者の存在を浮き彫りにすることが可能である。⁽⁸⁾また、寄進物と先行研究をあわせる検討することで、浴場業者の人的ネットワークを明確にできると考える。

そこで本稿では、打越に所在する宇智古志神社の寄進物を中心に、その周辺集落の状況も合わせて分析することで、可能な限り、浴場業者の出身地を再現していく。それと同時に、浴場業者の世代を踏まえながら、人的ネットワークについても考察を加えたい。この作業は京浜地域の都市形成史だけでなく、近代都市の同郷者集団の一端を明らかにすることにも繋がるだろう。なお、紙幅の関係上、本稿の分析対象は集落の公共空間である神社に限定し、寺院や教育機関、公民館等への寄付行為については改めて別稿で論じたい。

一、中之口地区と浴場業者の系譜

最初に現在判明している浴場業者の系譜について確認しておこう。「裏日本」論を展開した古厩忠夫は、一九九〇（平成二）年八月に刊行された『新潟県の百年』において、「正確な統計がないが、聞き取りによれば、東京の公衆浴場の最盛期の昭和十四、五年ごろ二八〇〇軒、その約半数は新潟県人の経営になるものであったという。東京で最初に風呂屋をはじめたのは西蒲原郡米納津村（現、吉田町）の伊藤赤太郎といわれている。そして、新潟県出身者の地位をきずいていったのは、西蒲原郡松長村羽黒（現、中之口村）の赤塚五郎と同姥島の田村虎太郎であった」と指摘

している⁽⁹⁾。今からおよそ三〇年前の調査なので、戦前の状況に詳しい人物も存命だったのである⁽¹⁰⁾。管見の限り、伊藤赤太郎の詳細はわからないが、赤塚五郎と田村虎太郎については『中之口村誌』に詳しいほか、二〇〇〇年一月に開館した中之口先人館（以下、「先人館」）の展示でも紹介されている⁽¹²⁾。

この先人館は中之口地区の文化施設で、西蒲原郡松長村大字羽黒出身の第三六代横綱・羽黒山政司を中心に、様々な分野で活躍した「先人」を展示、青年期を両国「朝日湯」で過ごした羽黒山だけでなく、浴場業者の先駆者である小林金吾や、戦後に活躍する板倉晴二の活動も紹介している⁽¹³⁾。また、浴場労働者から経営者への道筋を解説するほか、郷土史家の西村欣作⁽¹⁵⁾、北澤昭松などが精力的に史料を収集⁽¹⁶⁾、東京中之口会所所属の浴場経営者の調査も行った。特に会長であった長沼三郎は先人館に多くの史料を寄贈しており、常設展示では「萩の湯・長沼七司」の営業許可証（木札）も配されている⁽¹⁷⁾。これらから小林―赤塚―田村―板倉―長沼と連なる同地区出身者の系譜が確認できる。

そのなかで重要なのが、浴場業の道筋を開拓した小林の存在である。『中之口村誌』や小林金吾顕彰記念会作成の「小林金吾さんと中之口村」（先人館蔵）に依れば、一八五三（嘉永六）年に打越村金四郎家の長男として生まれた小林は、明治維新以降、水害に苦しむ蒲原平野の状況を憂い、一八七三（明治六）年に単身上京して身を立てる道を探った⁽¹⁸⁾。そこで重労働から忌避される浴場業に身を投じ、一八七八年に独立して成功すると、妻子のほか、村の若者を呼び寄せ、それぞれ経営者へと育て上げていった。郷里に対する小林の功績は大きく、農家の次男・三男が後に続いたという。打越に起源を持つ江戸の材木商が一八四七（弘化四）年に記した『虎勢道中記』は、下谷三ノ輪で浴場を営む打越出身者の存在を示している⁽¹⁹⁾ので、浴場業の道筋は近世期にもあったと考えられるが、近代以降は小林の存在が大きかったと推察できる。中之口では、小林を「越後風呂屋の系譜」をつくった人物と位置づけ、平成期に入ると、その顕彰碑を建立する動きもあった。

さて、小林に続く赤塚や田村は赤塚会、一六会というグループを組織、それぞれが全国浴場組合の代表を務めるなど、大きな力を持った「大親分」だった。⁽²⁰⁾さらに二人とも浴場業界を基盤に政界に進出、業界の発展に尽くしていた。西蒲原郡の若者はこうした有力者の存在を背景に、京浜地域へむかったのである。ここで疑問なのが、小林と赤塚、田村との繋がりである。田村は先に上京した赤塚が呼び寄せたことは明らかにしているが、小林と赤塚との関係は不明で、出身集落も異なっている。この点を宇智古志神社の寄進物を踏まえながら検討してみたい。

二、打越・宇智古志神社の寄進物

以前、筆者は県人会名簿等から図表「新潟県出身の浴場業者」(以下、「浴場業者一覧」)を作成、三一九人の浴場業者の出身地を明らかにした。⁽²¹⁾ただし、この図表には大きく二つの限界点があった。すなわち、一つは一部に記載はあるものの、町村の下、集落単位の出身地が不明な点、もう一つは県人会名簿に記載されていない業者がわからない点である。この点を寄進物に刻まれた文字情報から補っていく。最初に小林金吾の出身集落である打越の宇智古志神社から検討してみよう。

宇智古志神社は浴場業者の寄進物が多いことで知られており、狛犬や灯籠に浴場業者の名前が刻まれているほか、一九二二(大正一一)年に建てられた石鳥居石橋建設記念碑にもそれが確認できる。⁽²²⁾境内の寄進物で最も古い狛犬には、次のような文字が刻まれている。なお、以下、判読できない部分は■で示した。

史料一 狛犬(右側・阿形)

〔裏面〕明治三十四年四月吉祥日

在東京 小林金吾 佐藤豊蔵 ■■■ 金子仁三郎 小林ソメ

〔右側面〕世話人 ■■■■ (以下四人同じ)

経年による摩耗が激しいため、判読できない部分も多いが、小林金吾のほか、浴場業者一覧記載の佐藤豊蔵や金子仁三郎の名前が確認できる。また、小林ソメは小林金吾が自らの右腕となった西村龍吉と一緒に上京させた人物である。『改訂中之口村誌』に依れば、西村と金子は小林金吾の筆頭子分で、ソメと合わせて打越出身浴場業者の第一世代に位置付けることができよう。⁽²³⁾一方、小林金吾と佐藤の関係は判然としないが、佐藤は小林の次、金子よりも前に名前があることから、小林の次に上京したと考えられる。

史料二 狎犬 (左側・舛形)

〔裏面〕在横浜 平岡祐蔵 小林権七 小林金松 北條彦太郎 小林初太郎

兒玉幸太郎 高野周次 小林丑蔵 北澤庄平

〔左側面〕明治三十四年四月吉祥日

左側の狎犬には、横浜在住者の名前が刻まれている。東京の小林金吾と同様に、最初の平岡祐蔵が同方面の開拓者だと考えられる。明治期の状況はわからないが、一九二九(昭和四)年の浴場組合名簿では、北澤庄平は神奈川区で「金川湯」(神奈川町)と「第二隆盛館」(白幡町)を経営したほか、系列の隆盛館(青木町)に北澤清松、中区「富士の湯」(南太田町)にも北澤松蔵と、同性の経営者が確認できる。おそらくこれらは親族だろう。また、小林金松も川崎市堀川町で「第七富士見湯」を営んでおり、打越出身者は川崎方面でも活動していた。⁽²⁴⁾いずれにしても一九〇一年、日露戦争前の段階で浴場業に成功し、それぞれの地域に根を張っていた。

史料三 灯籠 (右側)

〔台座〕大正九年七月建設 東京府渋谷町第五区 寄進人 佐藤豊蔵

氏子総代 保倉平太 澤國太郎 小林栄太郎 佐藤清太

史料四 灯籠（左側）

〔台座〕 大正九年七月建設 寄進人 佐藤豊蔵

続いて古い寄進物は佐藤豊蔵が単独で寄進した灯籠である。佐藤は一八八五年から南豊島郡中渋谷村で「弘法湯」の営業を開始、さらに料理旅館の「神泉館」を開業させるなど、花街として繁栄する渋谷円山町の基礎を築いた人物である。⁽²⁶⁾ その「弘法湯」について一九一四年刊行の『渋谷町誌』は、『弘法湯』は渋谷の名を呼ぶもの、直に連想する程に都下に知らる。郊外の一旗亭にして如斯著名なるは甚だ稀なり。弘法湯は浴場を営業するにみならず神泉館の名を以て料理店を営業し、庭園建物婢女に至るまで附近に群を抜く。浴場の用水は弘法大師垂迹の地なりと称する井水にて、注連ヶ井戸と呼び、古来渋谷の一旧跡に数へられたり」と紹介している。⁽²⁶⁾ 「弘法湯」の広告は県人会名簿にも掲載されており、また、灯籠の大きさからも佐藤の成功が窺える。⁽²⁷⁾ 佐藤は渋谷町会議員を務めるなど、打越出身者のなかでも大きな力を持っていたと推察できる。⁽²⁸⁾ なお、井の頭線神泉駅の近くには、一八八六年八月二日に建立された弘法湯の石碑が現在も残っている。

史料五 石鳥居石橋建設記念碑

〔表面〕 大正十一年 石鳥居石橋建設記念碑 在東京村人会

〔裏面〕 石鳥居石橋寄付人名

〔裏面一段目〕 金子仁三郎 西村竜吉 渡辺勝太郎 栃倉奥太郎 田中幸吉

平岡周吉 平岡市次郎 内山忠蔵 北條栄七 青木吉太郎

小林市平 平岡祐作 竹内徳平 小林七太郎 佐藤三男三郎

〔裏面二段目〕 栃倉秀吉 西村喜一 浅野熊治 長谷川俊治 柳原新太郎

小林健作 渡辺藤三郎 平岡信之助 内山謙蔵 浅野鹿平

金子清作 北條喜一 浅野寅次郎 山崎徳七 長沼庄平

小林伊七 河治市平 佐藤謙太郎 田中正平

〔裏面三段目〕 保倉利平太 長谷川庄平 栃倉平治 浅野勇吉 小林由平

金子謙三郎 山上喜平 菊島ミチ

〔裏面四段目〕 氏子総代 保倉平太 澤國太郎 小林虎平 佐藤清太

保倉平太謹書 藤岱博謹刻

石鳥居及び石橋寄進を記念して建立された石碑には、四二人の上京者の氏名が刻まれている。そのすべてが浴場業に従事していたとは考えられないが、このうち筆頭の金子仁三郎以下、西村龍吉（竜吉）、田中幸吉、青木吉太郎、小林市平、小林健作、竹内徳平、浅野熊治、平岡信之助、長沼庄平、田中正平、小林由平の一二人は浴場業者一覧で確認できる。それ以外の人物を一九二九年の浴場組合名簿と照合すると、次の一〇人の情報が得られた。

平岡祐作…〔有楽湯〕（有楽町）

浅野鹿平…〔南の湯〕（入新井町新井宿）

長谷川俊治…〔第二南の湯〕（入新井町新井宿）

小林七太郎…〔住の湯〕（南千住町千住南）

佐藤三男三郎…〔朝日湯〕（下谷区上根岸町）

〔朝日湯〕（豊多摩郡中野町中野）

西村喜一・「日進湯」(亀戸町)

長谷川庄平・「清水湯」(四谷区坂町)

金子清作・「草津温泉」(豊多摩郡野方町下沼袋)

長谷川俊次・「第二南の湯」(荏原郡入新井町新井宿)

栃倉平治・「氷川湯」(荏原郡目黒町上目黒)

加えて、保倉利平太も一九三一年段階で南葛飾吾嬭町西の「鶴の湯」を経営しており、上京者の多くが浴場業に従事していた。

この記念碑で特徴的なのは、裏面の文字が上段から下段にいくほど小さくなっている点である。これは出資額の大さを表していると考えられる。例えば、小林金吾の側近だった金子仁三郎、西村龍吉を筆頭に、既述の栃倉奥太郎、複数の浴場を経営する小林市平や佐藤三男三郎などが名前を連ねていることから、最上段は財力のある親分衆だった。また、二段目以降は人名が増えており、打越出身者の人的ネットワークの拡大を示している。さらにこの石碑と栃倉奥太郎の碑から栃倉グループの序列(兄弟関係)もわかり、平岡周吉、河治市平、栃倉平治の順番で栃倉奥太郎の子分になったと考えられる。

以上のように神社の寄進物を分析することで、浴場業者の人的ネットワークを明らかにすることができた。打越の場合、明治初期に上京した小林金吾を起点に、その子分である金子仁三郎、西村龍吉を通じて、同郷者の人的ネットワークが拡大していった様子がわかった。こうした事象は打越周辺の集落でも起きていたと推察できる。続いて打越周辺集落の神社の状況を確認してみよう。

三、漆山・漆山神社及び住吉神社の寄進物

打越の周囲には、漆山、国見、南（稲場・八坊）、大曾根、道上、福島、羽黒、姥島、長所、牧ヶ島、西楨、並岡などの集落があり、【表Ⅰ】に示すように、各集落には地域の核となる神社が存在する。⁽²⁹⁾そこから上京者の寄進物が確認できる漆山、国見、南、福島、羽黒、長所の六集落の分析を進めていきたい。最初に漆山から検討してみよう。

漆山は打越など鎧潟以南の集落と、郡行政の中心地であった巻町を結ぶ街道筋に栄えた地域で、道の両脇には飲食店や商店が軒を連ねている。浴場業者一覧に依れば、漆山村は松長村に次いで多くの浴場業者を輩出した地域で、上京者による寄進行為も盛んに行われていた。例えば、同村出身の笠原五夫（新宿区「松の湯」の経営者）は、戦時中に疎開してきた浴場業者について、「町の神社仏閣、火の見櫓等々の寄進者もチラホラと町に貢献された人達です」と指摘している。⁽³⁰⁾実際、漆山七ノ丁の漆山神社と、漆山一ノ丁の住吉神社には、上京者の寄進物が確認できる。⁽³¹⁾まずは前者から検討してみよう。

漆山神社の寄進物で上京者の名前が明確に確認できるのは門柱のみである。

史料六 門柱（右柱）

〔表面〕奉 〔裏面〕大正十一年七月 当村兵蔵事 三條四日町 外山栄蔵

史料七 門柱（左柱）

〔表面〕納 〔裏面〕東京牛込神楽町 当村早助分家 五十嵐子之吉

五十嵐子之吉の名前は浴場業者一覧では確認できないが、後述するように、東京方面に暮らす漆山出身者の中心人物だったと考えられる。また、寄進の時期はわからないが、同社には樋口石松（一九三五年段階で大森区馬込町「藤

表Ⅰ 打越と周辺集落の神社

旧町村	集落	神社	現住所	上京者の寄進物
漆山村	漆山	漆山神社	新潟市西蒲区漆山2511	門柱
		住吉神社	新潟市西蒲区漆山2648	門柱／鳥居／狛犬
		漆山春日社	新潟市西蒲区漆山	—
	並岡	稲荷社	新潟市西蒲区並岡509	—
		神明社	新潟市西蒲区並岡140	—
大原村	国見	神明宮	新潟市西蒲区国見672	玉垣／鳥居／狛犬／灯籠
	南	稲場諏訪社	新潟市西蒲区南177	—
		八坊諏訪社	新潟市西蒲区南527	鳥居／水盤
	大曾根	白山神社	新潟市西蒲区大曾根甲1303	—
道上村	道上	神明宮	新潟市西蒲区道上418-5	—
	打越	宇智古志神社	新潟市西蒲区打越甲2781	石橋／鳥居／狛犬／灯籠
	牧ヶ島	神明宮	新潟市西蒲区牧ヶ島652	—
	福島	諏訪社	新潟市西蒲区福島1710	鳥居／忠魂碑
松長村	羽黒	羽黒神社	新潟市西蒲区羽黒1423-1	玉垣／狛犬
	姥島	草薙社	新潟市西蒲区姥島944	狛犬
	長所	白山社	燕市長所甲 44	鳥居／灯籠
		八幡社	燕市長所 2201	鳥居／拝殿屋根
米納津村	西槇	神明社	燕市西槇 1011	—

※ 1：各神社の所在地は新潟神社庁ホームページの「県内神社一覧」

(http://niigata-jinjacho.jp/shrine_niigata/) より作成。

※ 2：「県内神社一覧」で確認できない神社は現地調査で所在を確認した。

見湯」を経営」と樋口ハツの寄進した灯籠も確認できる。おそらくハツは石松の妻だろう。

一方、住吉神社では、門柱と石柱、狛犬に上京者の名前が確認できた。

史料八 門柱（右柱）

〔表面〕奉 〔裏面〕大正九庚申歳六月建之 発起人 外山栄蔵

史料九 門柱（左柱）

〔表面〕納 〔裏面〕東京有志世話人 五十風子之吉 澤波■太郎 藤澤石太郎 外山徳太郎

寄進の時期は漆山神社より二年早い。同じく外山栄蔵、五十風子之吉の名前も確認でき、この二人が同郷者を先導する立場だったと推察できる。また、浴場業者一覧に依れば、藤澤石太郎は牛込区早稲田鶴巻町で「亀の湯」を経営していた。

史料九 狛犬（右側・阿形）

〔裏面〕牛込富久町 谷五郎次男 佐藤駒治

府下大久保 新太郎次男 高橋嘉■

南千住 金太郎次男 藤澤金次郎

巢鴨宮下町 三平長男 外山栄吉

本所押上町 庄衛門次男 田邊庄二

大正九庚申年六月二十日

〔右側面〕奉

狛犬も門柱と同じ時期に寄進されたものである。浴場業者一覧に依れば、田邊庄二は本所区柳原町の「東鏡湯」を

営んだほか、藤澤金次郎もかつて四谷区塩町で浴場を営み、後に渋谷区代官山の「文化浴場」を経営することになった。また、文字から上京者の多くが次男だったことも確認できる。

史料一〇 狎犬（左側・吽形）

〔左側面〕 三條町 若槻群逸利

〔裏面〕 牛込神楽町 早助分家 五十嵐子之吉

全 早稲田鶴巻 ■分家 藤澤石太郎

西神田 ■■■ 澤波 ■太郎

浅草 ■■町 ■分家 ■■円 ■郎

本所向島 兵藏分家 外山徳太郎

越後三条町 兵藏事 外山栄蔵

〔右側面〕 納

左側の狎犬は摩耗が激しく、判読できない部分も多いが、門柱と同じく、五十嵐子之吉や外山栄蔵、藤澤石太郎の名前が確認できる。注目すべきは、実家との関係が示されている点で、左側の狎犬が「分家」と記しているのに対し、既述の右側の狎犬は「長男」、「次男」などを示すにとどまっている。おそらく左側の狎犬は独立した人物たちが寄進したもので、右側の狎犬に刻まれた名前はそれより若い世代だと考えられる。

史料一一 石柱

〔表面〕 住吉神社 〔裏面〕 昭和九年七月建之 東京牛込区早稲田鶴巻町

寄附者 藤澤三郎

藤澤三郎は一九二九年段階で下谷区龍泉寺町の「竹の湯」、一九三一年段階で浅草区象潟町の「曙湯」を営んでいたが、一九三五年以降は藤澤石太郎の「亀の湯」を継承している。ここから二人が親類関係であったことが窺える。

以上のように、漆山の神社の寄進物から浴場業者の世代と人的な繋がり、そして実家との関係などが明らかとなった。この点を踏まえつつ、他の集落も検討してみよう。

四、国見・神明宮の寄進物

打越に隣接していないが、同集落の北端から約二〇〇メートル北に位置する国見（旧大原村、後に潟東村、現・新潟市西蒲区）の神明宮にも鳥居、灯籠、狛犬、玉垣などに上京者の名前が刻まれている。⁽³²⁾

史料一二 鳥居

〔右柱〕 寄付者 東京在住 山岸忠平 小林寅吉 渡邊丑松

〔左柱〕 大正五年八月建之 渡邊忠七 山岸作太郎

境内の寄進物で最も古いのは一九一六（大正五）年建設の石鳥居で、浴場業者一覽に依れば、寄進者の渡邊丑松は大井町森下「第二日の出湯」、小林寅吉は南品川町二日市「三越湯」（後に大森区大森「澤田湯」に移動）を営んでいた。また、後述の灯籠から左柱の人名は地元の世話人たちだと考えられる。

史料一三 灯籠（右側）

〔正面〕 奉燈 〔右側面〕 石匠 佐藤寅吉

〔左側面〕 東京府渋谷町第五区 佐藤トシ

史料一四 灯籠（左側）

〔正面〕奉燈 〔右側面〕世話人 山岸作太郎

〔左側面〕大正九年九月

次に古い寄進物は一九二〇年九月に佐藤トシが建立した灯籠である。「渋谷町第五区」とあるように、トシは「弘法湯」を営む佐藤豊蔵の妻で、一九二三年一月に夫が没した後は、その経営者となっていた。⁽³³⁾ 宇智古志神社の灯籠の建設が一九二〇年七月なので、同じ年に夫婦で出身集落に灯籠を寄進したことになる。この事例から打越と国見、集落間の人的繋がりが窺える。なお、二人の息子である佐藤建造は渋谷区議となった後、一九四七（昭和二二）年四月に公選初の渋谷区長に就任している。⁽³⁴⁾ このことから佐藤家が移住先の有力者として根づいたことがわかる。

史料一五 狛犬（右側・阿形）

〔正面〕奉献 〔裏面〕大正十年五月 〔右側面〕石工 吉田町 石寅

史料一六 狛犬（左側・吽形）

〔正面〕奉献 〔裏面〕小林甚八三男 東京品川在 小林忠吉

世話人 小林久八 山岸作太郎

石鳥居の目の前にある狛犬も出郷者の寄進物である。小林忠吉の名前は県人会名簿や浴場名簿では確認できないが、小林甚八の「三男」と刻まれているところから、住吉神社の寄進物と同じく、農家の次男・三男が都市部へと移住していった様子が窺える。また、先の渡邊丑松、小林寅吉ともに品川方面で活動していることから、そこに国見出身者の拠点があったと推察できる。

史料一七 玉垣

〔入口右柱裏面〕東京有志連中 〔入口左柱裏面〕大正十一年九月一日

境内には一九二二年九月に氏子一同が建立した拝殿改築記念碑もあり、それと玉垣を合わせると、在村者と上京者が一体となって神社の整備に力を注いでいた。残念ながら寄進者はわからないが、渡邊丑松などが関係したのは間違いないだろう。翌年に関東大震災が発生した点を考えれば、一年遅れていたなら、その整備にも影響があつたと考えられる。

五、八坊・諏訪神社の寄進物

大曾根の分郷であつた南（旧大原村、後に潟東村、現・新潟市西蒲区）は打越と国見の間に位置し、集落は北の稲葉と南の八坊に分れている。前者は国見、後者は打越と接し、それぞれ諏訪神社を抱えている。⁽³⁵⁾ このうち後者で明治期の寄進物が確認できた。

史料一八 水盤

〔正面〕奉納 当村 杉山傳平 同辰平、同長五郎、同政一、同熊治、碓卯一郎

明治卅一年第九月吉日

手水に用いる水盤の寄進者は在村者であるが、浴場業者一覽を確認すると、浅草区で「廿世紀浴場」を経営した杉山傳平が八坊出身であることがわかる。杉山が上京して浴場業を始めたのは、これ以降の時期だろう。また、同集落は「杉山」姓と「碓」姓のみで、大原村出身の杉山辰治と碓寅平も八坊出身者だと考えられる。前者については、すでに一八九七（明治三〇）年段階で横浜において浴場を経営していた。⁽³⁶⁾

史料一九 灯籠（右側）

〔正面〕 東京 杉山 ■（健か） 〔左側面〕 奉納

史料二〇 灯籠（左側）

〔右側面〕 奉納 〔裏面〕 明治卅四年

経年による磨耗のため、判読しづらいが、寄進者は東京の「杉山健」と読める。この名前は県人会名簿、浴場組合名簿ともに確認できないが、打越と同様に、八坊出身者が日露戦争前の東京で成功していたことがわかる。なお、同社の鳥居は東京都台東区鳥越在住の杉山勇夫妻が一九六四（昭和三九）年八月に寄進したものである。

六、福島・諏訪神社の寄進物

打越の東側に位置する福島（旧道上村、後に中之口村、現・新潟市西蒲区）の諏訪神社では、一九二九（昭和四）年に建立された鳥居の記念碑から上京者の名前が確認できる。^⑦

史料二一 寄附人名（石鳥居寄付記念碑）

〔表面〕 石鳥居寄附者イロハ順 昭和四年九月

〔人名一段目〕 原於喜 原末松 富山乙七 富山敏雄 大場運吉 大場秀吉

渡邊佐一郎 渡邊末一 川端三八

〔人名二段目〕 金原華子 荒木太之吉 青柳角一 青柳セキ 荒木セツ

平松繁太郎 平松市蔵 平松糸次郎 平松三吉

〔人名三段目〕 東京発起人 原留吉 原本蔵 富山太三郎 原金太

〔人名四段目〕 当所世話人 道上村村長 平松遮那一郎

氏子惣代 富山能一郎 大場越三郎 原八子治

区長代理 山田太一

このうち浴場業者一覧で確認できるのは、東京発起人の原本蔵と富山太三郎の二人だが、建立年と同じ一九二九年の浴場組合名簿と照合すると、次の四人も確認できた。

原末松…亀の湯（本所区北新町）

原留吉…大黒湯（北豊島郡南千住町千住南）

原金太…高砂湯（北豊島郡王子町下十条）

大場運吉…寶湯（北豊島郡王子町豊島四）

福島出身の六人のうち、四人は北豊島郡内、特に原金太と大場運吉は王子町、富山太三郎は瀧野川町で営業していた。同集落出身者の拠点はその方面にあったと考えられる。後に大場は横浜市鶴見区に移り、「第一梅の湯」（鶴見町上町）を営んだほか、鶴見浴場組合の幹事長も務めた。また、原本蔵も一九四二年段階で鶴見区下末吉町「旭湯」を経営しており、大場の人脈から横浜に移ったと推察できる。なお、同社の境内には忠魂碑もあり、その装飾は原金太の寄進物であった。

七、羽黒・羽黒神社の寄進物

打越の南東部と接する羽黒（旧松長村、後に中之口村、現・新潟市西蒲区）は、既述の赤塚五郎の出身地である。それと同時に、羽黒山政司の出身地で、集落内には羽黒山の銅像も建っている。鎮守の羽黒神社にも大関時代の羽黒

山が寄進した玉垣が確認できるほか、浴場業者の寄進物も存在する。⁽³⁸⁾

史料二二 狛犬（右側）

〔左側面〕 奉納 〔裏面〕 大正拾年九月 寄附人 小林虎三 赤塚末太郎

史料二三 狛犬（左側）

〔左側面〕 奉納 〔裏面〕 寄附人（以下、補修のため判読不能）

左側の狛犬はコンクリートで補修しているため、寄進者の名前は確認できないが、右側の狛犬の寄進者は赤塚五郎の親族である小林虎三と、弟の赤塚末太郎で、後者は麻布区筈町で「越の湯」を営んでいた。⁽³⁹⁾ また、同区新広尾町の「末広湯」の経営者も同姓の赤塚隆太郎なので、おそらく親戚だろう。これらの人々は赤塚会の構成員だったと考えられる。従来の研究では、赤塚五郎による寄進行為は触れられていないが、親族が右側の狛犬を寄進している点から、左側の狛犬の寄進者は赤塚五郎だった可能性も考えられる。⁽⁴⁰⁾ なお、浴場組合の名簿を確認すると、小林は小石川西部組合、赤塚末太郎は麻布組合の組合長をそれぞれ務めており、赤塚グループが大きな力を持っていたことがわかる。

八、長所・白山神社及び八幡神社の寄進物

打越の南部、北陸自動車道を隔て東西に広がる長所（旧松長村、現・燕市）には、東に白山神社、西に八幡神社があり、それぞれに上京者の寄進物が確認できる。⁽⁴¹⁾ まずは前者から確認してみよう。

史料二四 鳥居夜燈玉垣地覆石奉納記念碑

〔表面〕 白山神社々掌 石崎義雄謹書

〔裏面〕 寄附者芳名

〔人名一段目〕 北條彌藤次 青柳忠太郎 小林忠平 小野塚正七 八百坂吉平

八百坂清七 北條忠吾 北條與藏 北條保太郎 八百坂新助

棒又治 棒作造

〔人名二段目〕 小林ふし 小林乙七 青柳勝平 土田ミヨ 本多トチ 川村ミキ

佐野キク 青柳幸三郎 梅澤長穂 北條チン 八百坂安治 八百坂與八

〔人名三段目〕 八百坂子之作 石田キン 浅野ハル 長谷川キヨ 中原フサ

澤口コマ 小澤ミチ 八百坂久四郎 棒福三 羽吹新八 山岸辰三郎

〔人名四段目〕 発起人 東京世話人 北條彌藤次 青柳忠太郎 小林忠平

八百坂清七 北條與藏 北條忠吾 棒作造

発起人 氏子世話人 北條金大 八百坂義松 棒長七 北條八郎

青柳周太郎 青柳青藏

昭和十一年八月 石工 阿部柳平 佐藤寅吉

浴場業者一覧で確認できるのは、北條彌藤次、青柳忠太郎、小林忠平、八百坂吉平、八百坂安治の五人で、北條・青柳・小林の三人は最上段に名前があり、かつ東京の世話人を努めていることから、資産に余裕がある親分だったと考えられる。実際、一九三一（昭和六）年段階で北條は吾孀浴場組合の組合長、青柳は池袋浴場組合の組合長を務めていた。また、建立年代が最も近い一九三五年の浴場名簿と照合すると、以下の六人について情報を得ることができた。

北條與藏…「松の湯」（豊島区長崎東町）

北條保太郎…「曳舟湯」（向島区寺島町）

八百坂新助…「日の出湯」(豊島区西巢鴨)

八百坂清七…「竹の湯」(下谷区二長町)

小林乙七…「亀の湯」(杉並区高円寺)

棒作造…「西山湯」(豊島区池袋)

この集落からも多くの人が上京し、浴場業者として成功を収めたことがわかる。続いて八幡神社の寄進物を検討してみよう。同社では、拝殿屋根改修記念碑と石鳥居に上京者の名前が確認できる。

史料二五 拝殿屋根改修記念碑

〔表面〕 拝殿屋根改修記念 奉納人 東京 小島久五郎 同喜世子

〔裏面〕 昭和十年六月 長所氏子建之

拝殿屋根改修記念碑には、浴場業者一覧にある小島久五郎の名前が確認できる。おそらく喜世子はその妻であろう。小島は下谷区谷中三崎町の「朝日湯」のほか、複数の浴場を経営しており、親分として成功を収めていたのだろう。

史料二六 鳥居

〔左柱裏面〕 昭和三十六年八月之建 寄進人在東京有志

高波眞一 高波倉治 澤口大三郎 高波二郎 高波俊一 中村六也

澤口茂樹 小島倉平 高波三男二 田中長平 高波隆吉

〔右柱裏面〕 氏子願人 澤口廣司 高波一二 八百坂丙式 小島昊一郎

服部法尊 青柳正二 高波浩

鳥居は戦後の寄進物だが、戦前から横浜で浴場を経営していた高波倉治の名前が確認できる。一九二九年段階で神

奈川区神奈川町「港湯」を営んでいた高波は、一九三七年段階で鶴見区潮田町「江戸之湯」を経営、この時点で鶴見浴場組合の幹事を務めていた。⁽⁴²⁾その後、高波がどのような道をたどったか判然としないが、横浜市金沢区の「港栄館」をはじめ、戦後も引き続き京浜地域で複数の浴場を経営していた。

九、人的ネットワークの考察

これまでの作業から県人会非加入の浴場業者を浮き彫りにすることができたほか、石碑に刻まれた情報によって浴場業者が故郷を離れた時期や、親分・子分の関係、集落間の繋がりが等もわかった。これらを従来から指摘されている浴場業者の系譜、すなわち小林金吾―赤塚五郎―田村虎太郎―栃倉晴二―長沼三郎の流れを踏まえながら改めて整理しつつ、打越を中心とした浴場業者の人的ネットワークについて考察を加えたい。

近世期の『虎勢道中記』に打越出身者の記述があるように、浴場業への道筋はその頃からあったと考えられるが、明治維新以降は小林金吾の成功が起点となり、打越から多くの人々が京浜地域へと移住していった。そうした流れのほか、「弘法湯」の経営者として成功する佐藤豊蔵が上京したほか、小林の子分として金子仁三郎や西村龍吉も上京、それぞれ経営者として独立していった。また、同じ時期に新開地の横浜でも打越出身者は成功、宇智古志神社や八坊・諏訪神社の寄進物を考えれば、明治三〇年頃までに京浜地域における地盤が固まったと推察できる。この人々を浴場業者の第一世代と位置付けることができよう。さらに上京者の成功は周辺集落にも波及、佐藤豊蔵と国見出身のトシの結婚に代表されるように、集落間の繋がりがから上京する者も相次いだ。一八八三（明治一六）年の生まれの栃倉奥太郎も二一歳、すなわち一九〇四年に上京している。

日露戦後、軍隊を除隊した赤塚五郎が上京、神田区で浴場業を始めたほか、東京浴場組合の結成に動いていった。⁽⁴³⁾

ここで注目したいのは、後進を支援する第一世代の存在である。赤塚は自伝において、「自分は浴場経営にも無経験であるので、いろいろと調べて見た。幸に渋谷の弘法湯と云ふ浴場が、近づきでもあるし、同県人で浴場を経営して居る者が少なからずあるので、調査には種々な便宜を得た」と、佐藤豊蔵の支援を記している。⁽⁴⁾ 赤塚家と佐藤家は親戚で、一九二三（大正一二）年に佐藤が亡くなった際は赤塚が親戚総代を務めた。⁽⁵⁾ 後に赤塚が全国の浴場組織をまとめ、業界唯一の衆議院議員になった点を考えれば、佐藤の果たした役割は極めて大きい。

さらに栃倉奥太郎や赤塚五郎を媒介した連鎖移住が続いた。栃倉を頼りに平岡周吉、河治市平、栃倉平治の三人が打越から巣立ったほか、米納津村の頓所富治、⁽⁶⁾ 小中川村の米山左和二も栃倉の下へ集った。また、姥島の田村虎太郎も友人の赤塚五郎、小野塚勇吉の誘いで一九一二年頃に上京、複数の浴場を成功させると同時に、組合代表として奔走する赤塚を支えた。⁽⁷⁾ このように上京者のネットワークは集落を越え、次男・三男を中心に新たな上京者が生れていった。これは宇智古志神社の石鳥居石橋建設記念碑からも窺え、狛犬に名前があった金子仁三郎を筆頭に、多くの経営者が名前を連ねている点は、同郷者の結束の強さを示している。また、福島や長所のように周辺集落に残る寄進物からも人的ネットワークの広さがわかり、地区レベルの組合長など、強固な基盤を形成していた。

関東大震災以降もこの人的ネットワークは維持され、郊外部への市域拡張とともに、新たな浴場で働く上京者が登場する。⁽⁸⁾ 例えば、一九〇六年に打越で生まれた栃倉晴二は叔父・奥太郎の影響を受けて一九二八（昭和三）年に上京、数年間の修業を経て独立開業していった。⁽⁹⁾ また、一九一六年に道上村大字河間で生まれた長沼三郎も一九三二年に上京、複数の浴場を渡り歩いた後、一九四〇年の結婚と同時に独立した。⁽¹⁰⁾ 敗戦直後の戦災復興期から高度経済成長期を支える世代がこの時期に巣立ったのである。

他方、昭和戦前期は大きな転換期であり、打越に戻っていた小林金吾が一九三二年に亡くなるなど、開拓者が鬼籍

に入ったほか、業界を先導していた赤塚五郎が一九三五年に五〇歳の若さで急死する。赤塚死後は盟友の田村虎太郎が業界を先導したものの、西蒲原郡出身者にとってそのダメージは大きかっただろう。加えて、戦時体制が浴場業を直撃、燃料不足に悩まされただけでなく、働き手も次々と戦場へ送り込まれた。一九三七年七月の日中戦争以降は栃倉晴二や長沼三郎も招集されており、戦地に赴くのは、この世代の共通体験だった。また、残された人々も戦況の悪化とともに家族を西蒲原郡に疎開させたほか、空襲が激しくなると、自らも故郷に戻った。戦時中は田村虎太郎も姥島に戻っている。この間に京浜地域は焼け野原になっていった。

以上のように、小林金吾を起点とする人的ネットワークは集落と世代を越えて拡大、先に成功した者が同郷の後進を育成するシステムは業界内で強固な結束をつくった。一方、故郷の寄進物に刻まれた「東京」や「横浜」の文字からは、遠く離れた土地にあっても、生まれた場所を大切にする上京者の気持ちは読み取れる。西蒲原郡出身者が浴場業界で確固たる地位を築いた背景には、同郷者の結束とともに、生まれた場所に対する強い想いがあったと考えられる。「雀森よ幸あれ」にある「親分は国の者を世話する時、国に帰ったやうな気がするのでせう」の一文はそのことを示している。

おわりに

敗戦後、京浜地域の戦災復興が始まるなか、疎開していた人々は再び上京、また、出征していた人々も浴場業に復帰していった。さらに高度経済成長期から平成期にかけて活躍する若い世代も新たに西蒲原郡から巣立っていく。同郷者を支援するネットワークは戦後も機能し、戦災復興の波に乗って発展していったのである。

さて、本稿では、先行研究を踏まえつつ、西蒲原郡内の寄進物を分析することで、打越を中心に、浴場業者の出身

地や世代、性格、移動の実態などを明らかにした。これによって、従来の聞き取り調査などで指摘されていた事象を寄進物の文字から裏付けられただけでなく、空白だった小林金吾と赤塚五郎の間を埋めることもできた。赤塚の業界進出の背景には、小林と同時期に上京した佐藤豊蔵の存在が大きく、その後ろ盾のもと、活動の基盤を形成していった。また、打越出身の佐藤と国見出身の妻・トシとの関係も集落間の繋がりを例示しており、打越周辺の集落に存在する寄進物は浴場業者の人的ネットワークの広がりを示している。ここに表れているのは、経営者の一部なので、従業員や関連事業者の存在を考えると、その裾野はさらに広がったと推察できる。明治期から昭和期にかけて西蒲原郡出身者のコミュニティが京浜地域に根を張っていた。

この状況を俯瞰すると、浴場業者の人的ネットワークは大きく三つの世代に分けることができる。すなわち、第一は小林金吾や佐藤豊蔵のように浴場業の地盤を築いた世代、第二は日露戦後から昭和戦前期にかけて活動する赤塚五郎や田村虎太郎、栃倉奥太郎の世代、そして第三は戦災復興から高度経済成長期に活躍する栃倉晴二や長沼三郎の世代である。このうち第二世代は第一世代の援助を受けつつ、浴場組合の代表として台頭、浴場業界を基盤としながら政界にも進出、さらに敗戦後は第三世代を支援して浴場業を再興させていった。また、先駆者とされる米納津村の伊藤赤太郎も小林や佐藤と同様に、第一世代に入るだろう。このように西蒲原郡出身者の人的ネットワークは同郷者の結束を核に形成されていったのである。郷里に残された寄進物はそのことを物語っている。

郷里への寄進行為は第三世代にも継承されていた。ここで疑問なのは、西蒲原郡と同じ現象は他の浴場業者の出身地、例えば、石川県や富山県でも起こったのか、という点である。すでに筆者は能登半島の現地調査を行い、蒲原平野と同様の寄進物を確認しているが、全体像の把握には至っていない⁽⁹⁾。浴場業者の普遍性や特殊性を見極める上でも、他地域との比較が必要不可欠である。この点の検証は改めて別稿で行いたい。

註

- (1) 二〇一八年八月一〇日現地調査。史料の引用にあたっては、カタカナをひらがなに改め、適宜、句読点を付した。
- (2) 前田健太郎編『昭和四年三月調査 六大都市府下浴場名鑑』（浴場新聞社、一九二九年）に「鈴木善太郎」の名前はなく、また、「枋倉奥太郎」の名前や日本橋区呉服町「東湯」も確認できなかった。一方、頓所富治は南葛飾郡南綾瀬村堀切「富士の湯」、枋倉平治は荏原郡目黒町上目黒「氷川湯」、米山左和二は牛込区白銀町「妙法湯」、澤信蔵は豊多摩郡高井戸町大宮前「大原湯」をそれぞれ経営していた。
- (3) 浴場業界の親分・子分関係は拙稿「新潟県と京浜地域の浴場業者―県人会名簿及び浴場組合名簿の分析を中心に―」（『國學院大學紀要』第五八巻、二〇二〇年一月）を参照。
- (4) 北澤昭松「浴場王 枋倉奥太郎の碑」（『広報なかのくち』第三九一号、二〇〇〇年三月一日）、同著・発行『ふるさと再発見 越後なかのくち物語』（二〇〇七年）五頁。
- (5) 前掲「新潟県と京浜地域の浴場業者」。
- (6) 自治体史では、成功した浴場業者を「郷土の偉人」として紹介しており、例えば、中之口村編『中之口村誌』（中之口村、一九六九年）は全国浴場組合の代表を務めた赤塚五郎、田村虎太郎、枋倉晴二の三人を挙げているほか、改訂中之口村誌編集委員会編『改訂中之口村誌』（中之口村、一九八七年）は先駆者である小林金吾を加えている。
- (7) 谷口貢「都市における同郷者集団の形成と故郷観―新潟県西蒲原地方の出郷者と東京の風呂屋・銭湯の展開―」（松崎憲三編『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院、二〇〇二年）。
- (8) 以下、県人会名簿については小柳市造編『大正五年 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、一九一六年）、同『大正六年九月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、一九一七年）、齋藤廣蔵編『大正八年十一月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、一九一九年）、同『大正十年十一月現在 新潟県人会々員名簿』（新潟県人会、一九二二年）、新潟県人親睦会事務所編『大正十三年十二月現在 新潟県人親睦会々員名簿』（新潟県人親睦会事務所、一九二四年）、遠藤謹吾編『大正十五年度版 新潟県人々員名簿』（新潟県人会、一九二五年）、高橋竹治編『昭和五年五月現在 最新全国新潟県人会々員名簿』（三栄舎、一九三〇年）、浴場組合名

簿については前掲『昭和四年三月調査 六大都市府県下浴場名鑑』、長崎驥編『昭和六年四月現在 東京浴場名簿』（東京浴場新聞社、一九三二年）、同『昭和九年二月現在 東京浴場名簿』（東京浴場新聞社、一九三四年）、同『昭和十年二月現在 東京浴場名簿』（東京浴場新聞社、一九三五年）、神奈川県浴場組合連合会編『昭和十二年二月現在 調 神奈川県浴場組合連合会浴場名簿』（神奈川県浴場組合連合会、一九三七年）、同『昭和十七年二月現在 調 神奈川県浴場組合連合会浴場名簿』（神奈川県浴場組合連合会、一九四二年）などを参照した。

(9) 大島美津子・佐藤誠朗・古厩忠夫・溝口敏磨『新潟県の百年』（山川出版社、一九九〇年）二二九―二四〇頁。

(10) 古厩忠夫は『新潟県の百年』の前提となった新潟県編『新潟県史 通史編八』（新潟県、一九八八年）においても「二・三男問題と女工出稼ぎ」（二七四―二八九頁）で浴場業の分析を行っているが、赤塚五郎と田村虎太郎以外の活動には言及していない。

(11) 一九一六年、一九一七年段階の県人会名簿には、京橋区新富町在住の浴場業として伊藤赤太郎の名前が確認できる。ただし、伊藤の出身地は米納津村でなく、燕町となっている。また、伊藤は初期の東京浴場組合の幹部で、一九一二年段階では幹事長を務めていた（東京都公衆浴場商業協同組合編『三十年のあゆみ』東京都公衆浴場商業協同組合、一九八〇年、一八―一九頁）。

(12) 前掲『改訂中之口村誌』六八八―六八九頁、六九五―六九六頁。

(13) 羽黒山政司と浴場業との関係は羽黒山記念誌編集委員会編『羽黒山記念誌』（新潟県西蒲原郡中之口村、一九八九年）を参照。

(14) 展示は岩本通弥「風呂屋に働く人びと―銭湯の民俗誌的考察―」（山本幸一監修『いま、むかし 銭湯』株式会社ZAX、一九八八年）を参考にしてている。

(15) 打越出身の西村欣策は西蒲原郡の農業改良事業に従事する一方、巻町史編纂調査執筆委員や中之口村文化財委員長を務めた。その活動は西村欣策著・発行『天長地久―新しい時代を求めて―』、『奇蹟の長寿とそのあしあと』（二〇〇二年）に詳しい。後者に依れば、母タツは西村龍吉の浴場で働いたほか、兄弟・姉妹も東京で浴場を経営していた。

(16) 北澤昭松も西村欣作と同じく打越の出身で、小学校教員、中之口村公民館長などを努めつつ、郷土史の研究を進めた。その成果は前掲『越後なかのくち物語』を参照。北澤の親戚も浴場経営者が多く、「私の両親も東京の浴場の系譜にあった」と述べている（「お風呂屋さんのふるさと」、『市報にいがた』第二〇四二号、二〇〇六年四月一六日）。

(17) 長沼三郎は字誌編集委員会編『字誌河間の今昔』（中之口村大字河間、一九九一年）に自伝「過ぎ去れば走馬灯の如し」を寄せたほか、『広報なかのくち』第三六二号（一九九七年一〇月一日）でも自らの半生を語っている。なお、長沼七司は弟である。

- (18) 前掲『改訂中之口村誌』七〇八―七〇九頁。「小林金吾さんと中之口村」は先人館設立時に収集された資料の一つで、原資料の複製が保管されている。内容は『改訂中之口村誌』と重なる部分が多いので、作成者は西村欣策だと推察できる。この史料は川端美季『近代日本の公衆浴場運動』（法政大学出版局、二〇一六年）二三五―二三八頁でも小林の活動を説明するのに使用されている。
- (19) 矢田俊文・新潟県立歴史博物館編『虎勢道中記 越後編』（新潟大学災害・復興科学研究所、二〇一三年）五四―五五頁。『虎勢道中記』（国立歴史民俗博物館所蔵）の一八四七年三月二五日には、「尤右の佐介殿も二十ヶ年程跡より打越村の家内不残ひき連れ、御当所へ罷出、湯屋家業被致、下谷三ノ輪に被住居ける」と記されている。
- (20) 前掲『新潟県の百年』二三九―二四〇頁。
- (21) 前掲「新潟県と京浜地域の浴場業者」を参照。
- (22) 二〇一七年一〇月二七日、二〇一八年八月一四日現地調査。
- (23) 前掲『改訂中之口村誌』七〇八―七〇九頁。
- (24) 一九三二年以降、小林金松は東京市大森区池上徳持の「玉水湯」を営んでいた。
- (25) 「弘法湯」の歴史は渋谷区役所編『渋谷区史』（渋谷区、一九五二年）九六七―九六九頁、佐藤豊・厚香苗「花街のお風呂屋」（倉石忠彦編『渋谷をくらす―渋谷民俗誌のこころみ―』雄山閣、二〇一〇年）などを参照。
- (26) 有田肇編『渋谷町誌』（渋谷町誌発行所、一九一四年）一〇二―一〇三頁。同時期、佐藤豊蔵は渋谷三業組合の組合長も務めていた（町民編三七頁）。
- (27) 例えば、一九一七年の県人会名簿掲載の広告は、「東京府下、渋谷町中渋谷神泉谷より湧出せる古来より有名な姫の井と称する井水を以て温泉となしたるものなり」と泉質を述べた上で、「宴会婚礼等特に勉強可仕候」と謳っている。「弘法湯」は玉川電車沿線の名所としても知られ、繁昌していた（『東京朝日新聞』一九〇七年三月一日）。
- (28) 落成祝賀協賛会編『渋谷警察署新築記念 渋谷町誌』（渋谷警察署新築落成祝賀協賛会、一九二二年）一四四―一四五頁。また、佐藤豊蔵は渋谷第五区の区長も務めた（一四六頁）。
- (29) 田中之口村域の神社は中之口村文化財調査審議会編『文化財誌 村内の堂宇』（中之口村教育委員会、一九八五年）、旧湯東村域の神社は湯東村誌編さん室編『湯東村誌』（湯東村、一九八九年）を参照。

- (30) 東京都公衆浴場業生活衛生同業組合新宿浴場組合編『牛込・四谷・淀橋・戸塚組合八〇周年記念誌 新宿浴場組合の一五年の歩み』（新宿浴場組合、二〇一〇年）八一頁。
- (31) 二〇一九年五月六日現地調査。
- (32) 二〇一八年一月七日、八月一〇日現地調査。
- (33) 「弘法湯」の繁栄は続き、一九二六年八月一七日の『読売新聞』は「中渋谷道玄坂上の大師の霊浴弘法湯」と題してその評判を報じている。また、竹本樹之編『渋谷区営業別納税者名鑑』（帝都探偵社、一九三五年）五二、一五九頁には、高額納税者として「弘法湯・佐藤トシ」、「神泉館・佐藤ハナ」の名前も確認できる。
- (34) 東京都渋谷区議会編『渋谷区議会史』（東京都渋谷区議会、一九七六年）三六八～三七二頁。
- (35) 二〇一八年一月七日現地調査。
- (36) 神奈川県警察部編『衛生行政判例集』（神奈川県、一九一八年）四二〇～四二二頁。
- (37) 二〇一八年三月二七日現地調査。
- (38) 二〇一七年一〇月二七日現地調査。
- (39) 猪野三郎監修『第十版 大衆人事録』（帝国秘密探偵社・国勢協会、一九三四年）五二頁。一九三五年三月五日の赤塚五郎の葬儀では、小林虎三、赤塚末太郎、須崎八十八が親戚総代を務めた（『東京朝日新聞』一九三五年三月四日）。
- (40) 前掲「都市における同郷者集団の形成と故郷観」。
- (41) 二〇一八年三月二七日現地調査。
- (42) 拙稿「横浜銭湯の大正・昭和史」（『横濱』第三八号、二〇一二年一〇月）。
- (43) 前掲『改訂中之口村誌』六八八～六八九頁。一八八六年三月に西蒲原郡羽黒村で生まれた赤塚五郎は、全国浴場組合の代表を務めたほか、神田区会議員、東京府会議員、同議長、衆議院議員、東京市会議員を歴任した。赤塚の活動については改めて別稿で論じたい。
- (44) 赤塚五郎「命がけで風呂屋を始め成功した体験」（『実業之日本』第三四卷第一四号、一九三二年七月）。
- (45) 『東京朝日新聞』一九三三年二月四日。

(46) 浴場業者一覧に依れば、頓所重一郎、頓所富八、頓所又藏、頓所世根吉など、「頓所」姓の経営者はいずれも西蒲原郡米納津村出身なので、頓所富治も同村出身者だろう。

(47) 前掲『改訂中之口村誌』六九五～六九六頁。一八八五年六月に西蒲原郡姥島村で生まれた田村虎太郎は、赤塚五郎とともに浴場組合の中核になったほか、浅草区会議員、東京府会議員を務めた。田村の活動も改めて別稿で検討したい。

(48) 関東大震災以降の変化は原田勝正・塩崎文雄編『東京・関東大震災前後』（日本経済評論社、一九九七年）を参照。

(49) 前掲『改訂中之口村誌』六九九～七〇〇頁。

(50) 前掲『過ぎ去れば走馬灯の如し』、同『広報なかのくち』第三六二号。

(51) 拙稿「北陸地方から横浜へ―銭湯経営者と同郷者集団―」（『開港のひろば』第一三九号、二〇一八年一月）。